



CONTENTS

- 文化・芸術インタビュー:新井知加代さん
「演劇は観るもの、創るもの」
- 【特集】2004年度公開講座
「イスラムと世界～その過去と現在～」
- デザイン学部長特別研究から
- インフォメーション

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
 静岡県浜松市野口町1794-1 〒430-8533
 ●Tel:053-457-6113 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

A r t s & C u l t u r e



浜松演劇協事務局長
新井知加代
 Arai Chikayo

県下最大の演劇鑑賞団体を支えて常にフル回転の新井さんに登場いただいた。40年に向けて、「浜松で、いい芝居が観たい」というこの一点で、会員として、またこの10余年は事務局長として情熱を注いでこられた。東京の劇団、劇作家、俳優、自治体、文化団体とも知己が多く、浜松では得がたい人材のおひとり。(聞き手は国際文化学科教授 須田悦生)

一初めに、「浜松演劇観賞協議会」という鑑賞団体ができたきっかけについて。

1953年ごろから浜松演劇鑑賞会というものがあり、のちに浜松市民劇場となり、それが浜松労演と合体して浜松演劇観賞協議会(*注 正式団体名としては「鑑賞」ではなく「観賞」としている)となりました。それでいまなおこんな珍しい名前になっています。規約にもありますように、私たちは営利を目的としない文化団体で、会の自主的な力で、よい演劇を定期的継続的に鑑賞することを目的にしています。心をより豊かにするとともによい演劇の普及とその発展を期しています。つまり私たちは劇を観るだけではなく劇団、創造団体とともに演劇を創るという姿勢を持っています。

一会員はどのぐらいですか。また、どんな運営をしているのですか。

民芸の「アンネの日記」の約3,300名で発足しましたが、テレビに出てる俳優さんが出演しないと駄目とか、(役者の)知名度で会員数の増減はありました。ここ10年ほどは5,000名をキープしています。この数は県下第一、全国でも福岡、仙台などに次いで五指に入ります。

会の運営は数人以上で「サークル」を作り、代表を出して会の運営に参加する方式です。入退会自由だと財政面でも非常に不安定で、そのために解散になった鑑賞団体もあります。また私たちはチケット斡旋業ではないので、会員には皆で演劇を創っていくという意識を持ってほしいのです。

一それでは俳優との交歓会などもあるのですか。

そのお芝居に出演する役者さんに前もって来てもらって話を聞いたり、終演後、交流会をもったりしています。ま

「演劇は観るもの、創るもの」 —浜松演劇協事務局長 新井知加代さん—

た、鑑賞例会ごとに担当サークルがあって、皆さん、搬入手伝い、入場整理など働いていただいていますから、スムーズな鑑賞ができ、会員さんも参加意識が高まります。奥さん方がお子さん、ご主人を誘って入られることも徐々に増えています。

一上演演目はどのようにして決めているのですか。

県演鑑連の15団体が月に一度集まり、統一例会で演目を絞り冊子を作って会員の皆様からアンケートをとり、全国の状況を聞きながら、演目を組んでいます。私たちは効率よく巡演を組むので劇団も交通費は上演料に組み込むなどしてくれて、一ヶ月2300円の会費で年7回の鑑賞が可能になるのです。

一感想文を会員の方に書いてもらっているようですが。

昔と違って、ものを書くのが希薄になってきています。でも、浜松は会員は多いので、感想を送ってほしいという劇団もありますし、他の鑑賞団体から、浜松で上演したときの感想文を参考にしたいというケースもあります。毎例会とっているアンケート結果や批評は機関誌に載せ、劇団にすべて送っています。

一上演会場について。

以前、アクトシティの評議員として3日以上優先使用を求めたとき、ある「有識者」から「あの2336名入る大ホールなら2回入れれば終わっちゃいますよ、それならお金もかからないでしょ」と言われたのです。わたしは「お芝居をご覧になったことはありますか」と聞いたのですね。アクトの三階、四階は傾斜がすごくて舞台の裏側の装置まで見えてしまうのです。それにバルコニー席は観にくいのです。ですから一階、二階しか使っていないのです。1回を千人位で観るということで一つの芝居を5回上演しています。今年は「丘の上のイエッペ」(地人会)や「おれたちは天使じゃない」(イツフォーリーズ)、「銃口」(前進座)などがアクトで上演されました。

一今後の展望について。

浜松は「文化不毛の地」といわれ、とりわけ演劇についてはそうですが、そんな評価を跳ね返して、演劇が大好きという人をいっぱい作っていきたいと思います。1年でもいいから継続していただけるようにしていきたいです。

一静岡文化芸術大学に期待するものは。

実際、文芸大でどのようなことが学ばれているのかわからないのですが(笑)、もっともっと何かで接点持てたら嬉しいなと思っているのですが…。

一アートマネジメントを学んでいる学生もたくさんいますので、インターンシップで学ばせていただくなど、いろいろ接点はあるはずですね。本日はお忙しいなか、ありがとうございました。

「イスラムと世界～その過去と現在～」

近年、イスラム（イスラーム）という宗教およびそれを信仰する人々への関心が非常に高まってきた。その背景にはNYでの事件やその後のイラク戦争、イラクをはじめイギリス、スペイン、インドネシアほか世界各地で頻発するテロ活動、「人質事件」の報道などがあるだろう。しかし一般には膨大かつ断片的な情報の海には浸かっているが、トータルなイスラム理解にはなかなか至らない実情にあったといえる。

今まで日本人にはあまり馴染みがなかったイスラムだが、浜松地域にはイラン、パキスタン、インドネシアなどのいわゆる「イスラム圏」から来住し、働いている人々が千人以上もいることを考えれば、イスラム理解がそのまま隣人理解につながっていく可能性があるといえる。

国際文化学科では最も今日的な課題、「イスラム」を掲げ、学科の総力を挙げて公開講座に取り組んだが、その結果、募集定員（100名）を大きく上回る受講者を迎えることができた（05年2月～4月、計7回実施）。ここにそのうちのいくつかの講座内容を紹介する（肩書は当時のもの）。

なお、学科の特性を生かしたこのような連続講座は今後も行っていきたいとのことである。



「エルサレム・アラブ人街の市場風景」
（沼田 敦氏撮影）

アラビア語のコーランとイスラム教

沼田 敦（国際文化学科非常勤講師）

宗教は多くの様々な掟を備えているが、その掟の根拠付けのあり方は各宗教で異なっている。なぜ個々の掟を守らなければならないのか、その根拠を積極的に示さない宗教もあれば、説得力のある根拠の提示に努める宗教もある。この「根拠付けのあり方」において、掟一つ一つの根拠が唯一の聖典コーランに遡ることを、歴史的事実はどうあれ、可能な限り客観的に示そうと努力した点に、イスラム教の特徴がある。そしてこの特徴を生んだ原因の一つに、聖典が教義内で占める地位の相対的な高さが考えられる。

いうまでもなくコーランはアラビア語で書かれている。このコーランの出現に先立って、アラビア語による広義の文学活動は、推定約150年の歴史を有していた。文学作品としてコーランを見た場合、コーランの文体は、先行するアラビア語の文学遺産の文体と、際だった対比を示す。特に、語彙の平易さ、文章の短さ、複雑な修辞的表現の回避などに、それは確認される。同時代の人々に、コーランの斬新で直接的な文体は、計り知れない驚きを与えたと想定される。適切な比喩ではないかもしれないが、J.S.バッハのみに親しんでいた耳が、突然モ

ーツァルトの旋律を受け入れた際に感じられる驚きに例えられるかもしれない。そしてその生命力は、1400年の時を経た後も、なお衰えていない。コーランの朗唱は、理想的な音楽のように、実際にアラブの人々の心を捉えている。アラブ世界でのコーランを、現代日本のお経と同列に捉えてはならない。

ここで視点を換え、イスラム教の個性へ光を当てるため、一般的に宗教が持つ社会的特徴を確認したい（ピーター・バーガーによる知識社会学的分析に依拠）。宗教は、共同体、特に前近代的な共同体を構成する重要な要素である。そのため宗教の理解には、共同体の理解が必要とされる。ただしここでは、宗教の理解に必要とされる範囲に限って、共同体の特質に言及する。

共同体の運営には、様々な掟が不可欠となる。血縁で結ばれた共同体であれば、古くは婚姻のルールから、新しくは食事の際の座席の位置など、様々な掟が見いだされる。共同体の歴史的進展につれて、こういった掟の一部は成文法となる。

さらにこの共同体の掟は、特に前近代的社会に於いて、共同生活を円滑にする手段以上の価値を持つ。すなわち、共同体に属する個人の「生の充実度」と密接な関係を持っている。様々な掟により、共同体内部に様々な役割が設定される。たとえば、一人の男性は、その共同体の掟により、「父」や「ある王の家来」

などといった、役割を担うこととなる。もちろん各役割には、果たすべき事項が、掟によって割り振られている。そして各個人は、その役割に定められている事項の実践によって、「生の充実感」を獲得することが出来る。

しかし問題は、共同体のこの掟が本質的に不安定なことにある。例えば、細分化された多くの掟を持つ雨乞いの儀式を行っても全く雨が降らなかった場合、雨乞いの儀式を規定する細かい掟は信頼を失う。こういった事柄は、雨乞いの掟を含む、その他の掟全体への信頼喪失にも繋がりがかねない。掟全体への信頼が失われれば、掟が定める役割を担うことへの躊躇も生まれる。役割を真摯に実践しないことは、個人の生の充実感への喪失に繋がる。

ここに宗教が登場する。掟への信頼崩壊をくい止める支えとして、宗教は働く。共同体の掟の信憑性を安定させ、さらに、個人の内面的生をも安定させる。体系的な世界観を背景に掲げ、例えば雨乞いの儀式に効果が見られなければ、「お前たちが犯した罪のためだ」などと説明を与え、掟そのものの首尾一貫性を守ろうとする。

しかしなお問題は残る。その当の宗教そのものは、どうやって信憑性を獲得するのだろうか？これには様々な回答が考えられるが、その一つに「超自然的なもの」への依拠があげられる。例えば、ある人物は死人を生き返らせた、この人物はただのものではない、だからこの人物の説く宗教は真理だ、といったように。

このように宗教は、超自然的な内容の助力で自ら信憑性を獲得し、その信憑性の力によって、共同体全体の掟の信憑性をささえ、さらにはその共同体に属する個人の内面的な生の充実感に寄与する。

次にこの図式をイスラム教に当てはめ、イスラム教そのものの信憑性を支える「超自然的なもの」とは何であるのかを考える。それが、最初に言及した「コーランのアラビア語の芸術性の高さ」と無関係だとは考えられない。イスラム教が一般に開祖の超自然性を強調しない点もこれと運動していよう。もちろんコーランの「主張そのもの」の力も看過できないが、翻訳ではその魅力の大半が失われる現実を考慮すると、翻訳不可能な要素を重視せざるえない。

一般に産業革命後の工業化社会は、「超自然的なもの」の信憑性に終止符を打った。しかし芸術的な高い洗練度という超自然性は、その例外足り得る可能性を残している。アラブ社会におけるこの事態の是非はまた別に論じる必要があるが、イスラム教の生命力の秘密の一つをここに求めることが可能であると思う。

[要旨] 特に前近代社会において、共同体の掟の信憑性と、個人の内面的生活の充実とを支える宗教そのものの信憑性の根元として、聖典の芸術的完成度の高さを持つことがイスラム教の特徴であり、それが21世紀を迎えた現代においてもイスラム教がその生命を長らえていることの理由の一つと考えられる。(ぬまた・あつし)



詰めかけた聴講の方々

参考文献

『現実の社会的構成—知識社会学論考—』
ピーター・バーガー、トーマス・ルックマン(著)

山口節郎(訳) 新曜社 2003

後記

講演当日には実際にアラブの音楽やコーランの朗唱を聞いていただきました。質疑応答では、共同体の掟の統一性に関するご質問などを頂きました。多くの方々にご聴講頂き感謝申し上げます。

中世・近世の西欧から見たイスラム

永井敦子(国際文化学科専任講師)

この講座の担当を引き受けるに当たり、西洋史、とりわけフランス近世を専門とする私が、「イスラムと世界」について考える手がかりになるような何事を言えるだろうかと、まず考えた。西洋人が中世以来つくり出してきたイスラム観には誤解と偏見が多い。このことについてはすでに30年近く前にエドワード・サイードが明らかにしたのだが、彼によれば西洋(の特に知識人と政治的指導者)は東洋を、西洋とは「違うもの(他者)」と見なし、しかも東洋には語らせずに、西洋が観察し支配する客体の位置に押し込めてきたとされる。西洋史研究者としてサイードの主張には主肯せざるを得ない部分が多い。さらに付け加えなければならないが、西洋の諸勢力は東洋を支配するだけでなく、西洋のなかで自らの威信ないし指導力を高めるためにも東洋に対する侮蔑や攻撃性を示す場合があった。したがって西洋の東洋に対する見方の背景を明らかにすることによって、西洋的なイスラム観への批判の手がかりを一つ付け加えることができるのではないかという結論に達した。

内容はまずサイードを引用して主旨を説明をしたのち、中世西欧(キリスト教圏のなかでもローマ・カトリック教圏)に視点を移した。この時代の西欧とイスラム世界との関係の特徴づける出来事の一つは、聖地エルサレムの「回復」をうたった十字軍である。ところで当時カトリック教会の長であった教皇ウルバヌス2世が聖地回復を呼びかけて人々の賛同を得たことは、教皇にとってイスラム教徒に対してのみならず、キリスト教の正教圏である東ローマ帝国に対しても、西欧ではカトリック教会の内部に対しても世俗世界の長である皇帝(当時

はハインリヒ4世、2代前の教皇グレゴリウス7世との間の確執で知られる)に対しても、自らの威信を高める契機になった。十字軍とは開始時点からこのように西欧内部における対立の文脈を含んでいた。なお十字軍という言葉は、聖地周辺のイスラム教徒に対する攻撃のみならず、イベリア半島のイスラム教徒、バルト海方面のスラヴ系の非キリスト教徒、および西欧内部の異端(誤った信仰を持つとされるキリスト教徒、南フランスのカタリ派など)に対する攻撃の際にも用いられた。西欧でルネサンスを経て近世と呼ばれる時代になると、西欧の外ではイスラム教徒の君主を戴くオスマン帝国が、東ローマ帝国を征服して勢力を拡大した。西欧内部では宗教改革が起こってカトリック教会の影響力が減退した一方で、諸国・諸領邦の間の対立が激化し、なかにはフランス王フランソワ1世のようにオスマン帝国を同盟可能な相手と見る者が現れたが、それも西欧内部の覇権闘争の文脈においてであった。

西欧で中世の「十二世紀ルネサンス」の時代、知識人はアラビア語の翻訳活動を通じて古代ギリシア・ローマの古典を知り、またイスラム教についてもキリスト教と共通点があると気づいた者がいた。むしろ近世になって、西欧の知識人は古代ギリシア・ローマの遺産の継承者を自負した。しかも中近世の西欧の文献では、概してイスラム教徒を「サラセン人」や「トルコ人」などと呼び、キリスト教徒として正しくない様々な特性を持つ者として描き、またキリスト教徒として正しくない人物について「トルコ人」に例えるような比喩を用いた。例えば叙事詩「ロランの歌」の敵役マルシル王は「神を崇めぬ」そして「マホメットに仕え、アポリンを拜む」とされる。ルネサンス期に画家ホルバインまたは弟子がエラスムスの「痴愚神礼讃」の挿し絵用に描いた素描でも、「トルコ人」はギリシア・ローマ神話の神の像を拜むポーズを取る(エラスムス自身は痴愚神の口を借りて、トルコ人とユダヤ人がその信仰を正しいと思っているのは自惚れだと言う)。17世紀の劇作家モリエールの「ドン・ジュアン」では、主人公ドン・ジュアンの従者スガナレルが主人を陰で「犬、悪魔、トルコ人、異端者」などと罵る。18世紀には西欧人の書き手が「トルコ人」の寛容などを称賛する場面があったが、それもイスラム教徒の実際の姿を示すのではなく、西欧内部での不和を攻撃する目的で逆に異国人を美化し捏造したものが多かった。近代以降、西欧の軍事的強大化とともに西欧の世界観が東洋を含む各地に影響を与えた歴史を含めて、私たちはイスラム観を形成し直す必要、そのために率直にイスラム世界と向き合う必要があるだろう。

問題点の提示のみがあって将来的な展望を示すものではなかったため、また西欧的な視点にとどまっていはいけなと言いつつ、私自身がイスラム世界を独自に分析する視点を持っていないために、未消化に終わった部分が多かったかもしれない。それ以前に説明や言葉遣いに稚拙で不注意な点や、そもそも聞き取りにくかったというご批判もあった。講座では明言しなかったが、念頭にあったのはエマニュエル・トッド

による、現在のアメリカ合衆国は世界的な覇権を自ら維持していると主張するべく(トッドはアメリカがもはやEU諸国・ロシア・日本などに対して覇権を失ったと見ている)、アフガニスタンやイラクという「戦略的に取るに足りない敵」を攻撃しているとの見解であった。アメリカも、また私たちも世界の諸地域の問題を扱う際に、いわゆる先進諸国の利害関係を優先してはいないか。(ながい・あつこ)

インドネシアのイスラムと政治

— 宗教紛争の背後を読む —

池上重弘 (国際文化学科助教授)

公開講座「イスラムと世界」は、私の担当回から、特定国の文脈のなかでイスラムをめぐる問題を考えることになった。インドネシアは世界最大のイスラム教徒人口を有するが、このことはあまり広く知られた事実とは言えなかった。しかし、2001年の9・11同時多発テロや2002年のバリ島ディスコ爆破事件を契機に、インドネシアのイスラムに対する関心が急激に高まった。また1998年5月のスハルト大統領退陣以降、不安定な政治状況下で、ある宗教と別の宗教を信仰する者間の「宗教紛争」が頻発したことも、イスラムへの関心を高めることになった。

私の担当回では、インドネシアの歴史と重層的な宗教の関わりを踏まえた上で、スカルノ政権からコドヨノ政権にいたる20世紀半ば以降のインドネシア政治とイスラムの関係をたどった。さらに、グローバル化が進むこんにちの状況を念頭に置きながら、マルク地方の事例を中心に取り上げて「宗教紛争」の背後を読み解いた。

2000年の人口センサスによればインドネシアの総人口は約2億人強、このうちの約9割に相当する1億8千万人弱がイスラム教徒となっている。しかしインドネシアの島々にイスラムが浸透するのは13世紀以降のことである。では、それ以前はどうだったか。元来これらの島々に暮らす人々はアニミズムを信仰していた。中国・インド・中東を結ぶ香辛料や森林産物の交易ネットワークの中継地としてこの海域に外部の人々が行き来するうち、港市国家やジャワの農業国家にインド文明(ヒンドゥー・仏教)が浸透した。13世紀頃、インド経由でイスラムが伝わり、インド文明にかぶさる形で広まった。

1511年のポルトガルによるマラッカ陥落以降、平和な交易の時代から武力を背景にした交易ネットワーク支配の時代へと変わってゆく。香辛料の産地であるマルク地方や、海域東部の交易拠点である東ティモールにもポルトガル勢力が定着し、カトリックが浸透した。その後、この海域の支配者はイギリス、オランダへと推移し、19世紀半ばからはプロテスタントの布教活動が活発化した。領域支配の進展に伴い、仏教徒の中国

人労働者が多数やってくるようになり、イスラム、カトリック、プロテスタント、ヒンドゥー、仏教、その他(アニミズム等)といった宗教的多様性が現出するに至った。

1945年に独立を宣言し、1950年に実質的な独立を達成したインドネシアは、民族的・言語的・宗教的に多様な人々からなる国家である。初代大統領のスカルノは、国民統合を強力に推し進める上で、「多様性のなかの統一」を国是とし、建国五原則「パンチャ・シラ」を定めた。パンチャ・シラの第一項は「唯一なる神への信仰」をうたっているが、「唯一神」の語によって宗教的多様性を容認することで、イスラム国家樹立を目指す勢力に対するシフトとなっている。と同時に、なんらかの信仰を持つことを求めるこの原則は、無神論を主張する共産主義勢力に対するシフトにもなっている。1965年の9月30日事件(共産党によるクーデター未遂事件とされる事件)を契機に実質的に政権を掌握し、第2代大統領に就任したスハルトは、開発独裁を推進する新秩序体制を確立した。政治面では言論弾圧を徹底し、宗教面でも「パンチャ・シラ」の理念を推進するという名目のもと、イスラム勢力を政治勢力として骨抜きにした。

1997年のアジア経済危機に端を発した政治的混乱のなかで、1998年5月、スハルト大統領は退陣を表明した。その後2004年9月にユドヨノが第6代大統領に就任するまで、インドネシアの大統領はめまぐるしく交代し、民主化・地方分権化の進展、中央政府の求心力低下など、急激な政治変化と社会変化が生じた。国軍の政治的機能が低下し、それに代わってイスラムが政治勢力として台頭してきた。このような地盤変化のなかで、東ティモールやパプア、アチェなどで分離独立運動が高まりを見せ、スラウェシやカリマンタン、そしてマルクにおいて「民族紛争」や「宗教紛争」が頻発した。

マルク諸島のアンボンの「宗教紛争」を事例に、その背景を考えたい。マルク諸島は香料貿易の中心のひとつで、長くポルトガルの支配を受け、カトリックが浸透している。オランダ植民地時代には、オランダ政府軍の兵士や官吏を数多く輩出した。1950年代にキリスト教系住民を中心にインドネシアからの独立運動が活発化したが、弾圧された活動家の多くはその後オランダに逃れ、独立運動は下火になった。

アンボン島では1999年1月、レバラン(イスラムの断食明け)にキリスト教徒の地元民とイスラム教徒である南スラウェシからの移住者との間で大規模な争いが発生、その後双方が異教徒の民家や商店、宗教施設を焼き討ちするに及んだ。たしかにキリスト教徒とイスラム教徒の間に、争いの火種となる対立要因がなかったわけではない。移住者のイスラム教徒が漁業や商業を独占する事態が進行していたし、1970年代以降、イスラム教徒が地方政治の舞台に進出し、公共事業の権益配分をめぐる対立も深刻化していた。その後騒乱はマルク諸島の他の島にも広がり、復讐が復讐を呼ぶ形で二年ほどの間に約8千人が死亡、35万以上が避難民になったという。

しかし、その背景にはジャカルタでのマルク出身者のギャング集団間の抗争とそれを政治的に利用した勢力の関与がうかがわれる。マルク紛争の発生と長期化および拡大の背景には、ポスト・スハルト時代に政治的発言力が大幅に低下した国軍による意図的な工作や紛争解決への努力を怠るサボタージュがあると考えられる。また、グローバル化が進むなかで急進派イスラムのネットワークがマルクにも及んだことも背景のひとつとなった。

各地の地方紛争は、「宗教」の違いによる対立、「民族」の違いによる対立として語られるが、宗教や民族を与件として設定する文化論的アプローチは、その背後にある歴史的経緯や政治・経済的要因を見落としてしまうおそれがある。宗教や民族はそれ自体として対立や紛争を引き起こすものではない。①どのような状況下で、②いかなる文化的シンボルが動員されて対立の軸として強調されるのかについて、個々の文脈に目配りした議論が必要である。宗教の違いをことさら強調するのではなく、また民族の違いというだけで思考停止に陥ることなく、宗教的・民族的多様性ととも生きる道を模索しなければならない。(いけがみ・しげひろ)



講義にも熱がこもる。

フランスと北アフリカ諸国 —宗教シンボル禁止法から考える—

石川 清子 (国際文化学科助教授)

フランスで2004年9月に施行された「宗教シンボル禁止法」は国内外でさまざまな反響を呼んだ。公立小中高校でイスラム女性の被るスカーフ禁止を主眼としたこの法律を中心に、フランスにおけるムスリム(イスラム信仰者)の現状について考察、報告することを講座担当のねらいとした。

この法律施行とその反応については日本でも詳しく報道され、一部では9.11テロ以降のイスラムの脅威に抗するものと受け止められた。また、個人の信仰の自由に不寛容なフランスと解釈する向きもあった。さらに、同年8月には、フランス

のジャーナリスト2名がイラクで拉致され、イスラーム過激派
犯行グループはこの法律撤廃を条件として要求した。後に人
質は解放されるが、イラク派兵反対を固持し人質事件とは一
歩置く立場にいたフランスは予想外の内政干渉を突きつけら
れた。しかし、ここからフランスのイスラーム嫌悪、非寛容を
結論づけるのは短絡である。この国の北アフリカを中心とす
るイスラーム系移民の歴史、共和国の政教分離の原則、80年
代末から絶えず論議されてきたスカーフ問題、イスラーム系
移民第二世代特有の困難、そして問題となる女子生徒という
ジェンダーを考察することで、この法律の背景から立ち上る
フランスのムスリムの現状が見えてくる。

フランスは美食とモードの国と連想しがちだが、現在では
欧州最大500万人のムスリムを抱え、国内でもイスラームは
カトリックに次いで第二の宗教になっている。とりわけ、19世
紀から植民地支配を受けたアルジェリア、モロッコ、チュニジ
アの北アフリカ諸国からの移民がイスラーム人口の大半を構
成している。地方都市の街路案内にも、キリスト教の教会やユ
ダヤ教のシナゴグと同様にモスクも表示され、北アフリカの
料理クスクスは、いまやフランスの国民食と言っても過言で
はない。日常生活においてイスラーム圏の文化に遭遇する率
がかなり高いのが現在のフランスの姿だろう。フランスは第
二次大戦後の高度経済成長期に、労働力不足を補う名目で北
アフリカ諸国から積極的に移民を受入れた。70年代のオイル
ショック後、景気が停滞して移民の波は止まるが、それまでの
移住者は帰国せずフランスに留まることを選択し家族を呼び
寄せた。今回の法律の対象となるスカーフを被って登校する
女生徒は、そういった家族の娘たち、及びフランス生まれの移
民第二、第三世代の子どもたちである。

宗教シンボル禁止法が対象とするのはイスラームのスカー
フだけではなく、「宗教への帰属をこれ見よがしに示す標章
や服装」となる大きすぎる十字架やユダヤ教男子の帽子も含
まれる。フランス革命以来、政教分離を共和国の原則とする
この国では、私的空間での信仰の自由は尊重するが公的空間
に宗教色を持ち込むことを禁じ、当時はカトリック教会排除を
主眼に、1905年に「教会と国家の分離に関する法律」が制
定されている。アメリカやドイツの公立学校でイスラーム式
スカーフを被っても問題にならないのにフランスで問題にな
るのは、共和国独自の「非宗教性」という原則に拠る。また、
スカーフ問題は近年突然表出したのではなく、1989年、パリ郊
外中学校でスカーフを外すのを拒否し続けた女子生徒の退
学を発端に、共和国の論理を擁護するか(スカーフ拒否派)、
それとも相違を認めるか(スカーフ容認派)という国家を二
分するほどの大論争に発展して以来、再三議論の対象となっ
てきた。今回の法律制定は、長い論議にひとまずの結論を出
したと言える。

しかし、未成年の女生徒が退学のリスクを冒してまでなぜ
スカーフに執着するのか。植民地時代の偏見に加え、多くが

劣悪な住環境と言える大都市郊外に居住し社会の下層部を
構成する北アフリカ系住民は、差別の対象となってきた。加え
て、フランス生まれの第二、第三世代の若者は自らの文化的
アイデンティティ確立が困難ゆえに、イスラームに打開の道を
求める者も少なくない。親世代のイスラームとは異なるフラ
ンスで生まれたイスラームであり、時としてモスクや集会所は
イスラーム過激派の温床にもなりうる。さらに女子は、共同体
や家庭の男性からの差別、いわゆる二重の差別を受ける場合
が多い。イスラームという宗教は彼女たちにとって、現状を脱
してより良い自己実現を果たすための信念の拠り所となる。
信仰の一部であるスカーフ着衣は、共和国が教える自由と平
等を獲得するために不可欠であり、過剰な宗教的意思表示な
どではないというのが彼女たちの言い分だろう。法律施行後
も退学を余儀なくされる生徒は少なくない。

移民第二世代と一括りにしがちだが、ジェンダーによる差異
を考慮すると見えてくるものはちがってくる。イスラーム過激
派のテロを警戒するなら、むしろイスラーム系住民の男子が
問題になってくるはずである。フランスのイスラーム、移民、
特に郊外における差別と非行の問題については、これまで第
二世世代の男子を前提に議論されてきた。今回の禁止法は、そ
の陰に隠れていた女子を照らし出す結果になった。

担当回では各事項に詳細に立ち入ることができず、また用
意した写真や図版の紹介も不十分となり大いに反省している。
質疑応答時には、イスラーム圏の女性事情やスカーフ、ヴェー
ルの種類など予想以上に質問や意見があり、受講生の方々の
意欲的な姿勢に敬服するとともに、こちらも多く得るものが
あった。(いしかわ・きよこ)



熱心に聴き入る皆さん

***なおこのほかに、次のような講座が展開された。**

「イスラームへの招待～信仰における戒律の重み～」
(徳増克己専任講師)、「イスラームによる民族の創
出～中国の少数民族回族の足跡～」(孫 江助教授)、
「アメリカの政治・外交とイスラーム」(高橋和夫放送
大学助教授)

デザイン学部長特別研究から

タクシー研究プロジェクト

【公共交通の役割を担うタクシーの再考】

■ 河村暢夫 (デザイン学部生産造形学科教授)

河村暢夫 河原林桂一郎 黒田宏治 佐井国夫 迫秀樹 桜井龍 成田晋 梅本良作 高山靖子

タクシーの歴史は100年程になるが、タクシーキャブとして開発された例はロンドンタクシーを除いてはないと言える。殆どが生産車をベースにして改良を加えた程度が実情である。移動の場所と時間を限定される電車やバスと比べ、場所や時間に限らず戸口から戸口への移動と個々のニーズに応えられるサービス等が今後の活路としてタクシーの期待は大きい。

本研究ではタクシーの抱える問題点を分析しながら、車両のデザインを最終目標にして9名の研究員との合同プロジェクトであった。

文献や独自のアンケート調査によって、タクシーの殆どが1~2名乗車の少人数の乗客を乗せた短距離の走行であると解析。これを基に、車両はコンパクトな設計とし、昼夜を通してタクシーの視認性を高めるサインのデザイン、乗降性を配慮したスライドドアの採用を決定。また、インテリアにおいては、運転者への労働の配慮から、天井を高くしてコックピットスペースの圧迫感を排除し、客室との間に仕切りを設けて防犯対策を施した。心臓部の動力は環境に配慮した燃料電池を使用。車両の構成も運転室回りを共通部品として2種類の客室を有する別車種へ展開することにより生産時のコストと材料の削減を考慮している。

また、すでに導入されつつある情報システム化の流れを再考し、新たな運営やサービス等への展開を検討した。

今回の研究では3Dによる立体研究が大きな目的の一つであった。手描きによるスケッチからコンピューターの解析によるデジタルデータに置き換えて、CAM加工機にて立体モデルを作成する一連のプロセスを研究し、本モデルにて実行した。

研究予算の一部をCAMソフトに投資したが、6年振りに本格的な加工機の運用が出来たことは喜ばしく画期的なことである。

平成15年度と16年度の2年間に亘る研究の成果を平成17年6月27日(月)より7月3日(日)まで本学西ギャラリーで展示形式で発表し、1/5クレイモデル1台、1/5ケイジモデル1台、24枚(A1)の説明パネルを会場壁面に展示した。

展示会の反響は極めて大きく、新聞社、雑誌社の目にとまり、殊に自動車誌の【カースタイル】の特集記事として掲載され、この研究のみならず本学の存在を世界の自動車関係者に発信できたことも幸運であった。

また、タクシー業界の経営者も来館されて、今後の業界の参考になったと異口同音にコメントされたことも嬉しいことである。

この研究は机上の計画で終わることなく、自動車メーカーとのタイアップにより実動する試作品ができ、浜松の市街地を走り回る新しいタクシーの実現が近い将来可能となろうことを期待して、夢に向かって更なる研究を続けていく予定でいる。



レンダリングスケッチ



1/5クレイモデル



1/5ケイジモデル



会場風景

平成17年度の事業計画

※今後予定しているものについては予告なく変更することがあります。

1 研究拠点の形成を目指した研究活動と情報発信

①文化・芸術研究センター研究プロジェクト

- ア パーチャルミュージアム「産業考古学館」研究 文化政策学科 種田教授他
- イ 「センターのあり方」に関する調査研究 芸術文化学科 伊藤教授他

②ニュースレター「文化と芸術」(センター情報誌)の発行

2 開かれた大学を実践する地域との交流

①公開講座、文化芸術セミナーの実施

- ・公開講座「生活と文化」シリーズⅦ ～しあわせと暮らし～
 - 9/3 高齢化社会と生きがい(文化政策学科 森教授)
 - 9/10 いろいろな都市環境について(空間造形学科 寒竹教授)
 - 9/17 真のユニバーサルデザイン(生産造形学科 坂本教授)
- ・公開講座「日本からアジアから」～人の流れ・モノの流れ～
 - 11/12 東アジア史の中の日本(国際文化学科 山本教授)
 - 11/26 江戸幕府の対外政策と朝鮮通信使(国際文化学科 西田講師)
 - 12/3 激動する中国と日中関係を読み解く(慶応義塾大学東アジア研究所長 国分良成法学部教授)
 - 12/10 日中経済関係の発展と展望(国際文化学科 馬成三教授)
 - 12/17 アジアの日本語教育(国際文化学科 広瀬講師)
 - 1/7 ベトナムの近代と日本(国際文化学科 岡田助教授)
 - 1/14 韓流と日流の文化論的考察(国際文化学科 河信基非常勤講師)
 - 1/28 東アジアの芸能と民俗(国際文化学科 須田教授)
- ・夏季公開工房(8/27～29)
 - 8/27～28 花と野菜のスケッチ(生産造形学科 田邊教授)
 - 8/28 光具vol.7—万華鏡—(技術造形学科 佐藤助教授)
 - 8/27～29 テキスタイル(外部講師)
- ・春季公開工房(3月下旬)、3メニュー程度
- ・専門公開講座(7/16,10/12/25)
 - 3次元CADデータの活用技法(技術造形学科 望月教授)
- ・文化芸術セミナー
 - メディアアートシンポジウム2005(8/4～6、技術造形学科 長嶋助教授)
 - シヨパンのアンサンブルを、19世紀のサロンの響きで(2/26浜松、3/14東京、芸術文化学科 小岩講師)

②産学官連携の推進

- ・受託研究・共同研究の実施
- ・産学官連携フォーラム(3月上旬)
- ・「しずおか新産業技術フェア2005」出展(9/15～17)

③地域文化事業の実施、協力

- ・第5回新能(運営:新能プロジェクトチーム、)
 - 10/11 座談会(芸術文化学科 梅若助教授)
 - 10/12 現代劇「義経と弁慶」
 - 10/13 能「安宅」

編集後記

本号は特集として昨年度国際文化学科主体で行われた公開講座「イスラムと世界」を取り上げた。学科の専門研究者集団による連続講座は大入りの盛況だったが、今後のひとつのありようを示しているようだ。「文化・芸術研究センター」は本学の中心的機関として今、大きく飛躍しようとしている。広報紙の役割も大きくなる。自覚したい。(S)

Art & Culture



文化・芸術研究センター
ニュースレター

Vol.3

November, 2005

発行人: 木村尚三郎
編集人: 須田悦生、河岡徳彦
発行: 静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター
(事務局 静岡文化芸術大学 企画室)



古紙配合率100%再生紙及び大豆インクを使用しています。